

魚類防疫に関する技術指導と研究

(魚介類安全対策事業)

石原成嗣・松本洋典・清川智之・岡本 満・福井克也

1. 研究目的

海面及び内水面の魚病被害軽減と魚病のまん延防止のため、魚病検査や水産用医薬品の適正使用の指導及び養魚指導・相談を行なう。

2. 研究方法

種苗生産、中間育成、養殖場等の生産施設を巡回し、疾病の対処法や飼育方法の指導・助言を行うとともに、各生産施設や天然水域における疾病発生時には現地調査、魚病検査により診断を行った。検査方法は、主に外観および解剖による肉眼観察、検鏡観察、細菌分離、PCR 検査等により行った。細菌が分離された場合は、対処法および水産用医薬品の適正使用について指導を行った。

モニタリング調査として、ヒラメのクドア属粘液胞子虫症 (*Kudoa septempunctata*)、コイヘルペスウイルス (KHV) 病について、農林水産省ガイドラインおよび水産庁が作成した防止対策等に従って PCR による定期的な保菌検査を実施した。さらに、ヒラメのシュードモナス症について、種苗生産施設および中間育成施設において PCR による定期的な保菌検査を行った。

なお、KHV 病の養殖業者の定期検査については、昨年度までは全水域を対象としていたが、今年度の7月からは未発生水域のみを対象とした。また、昨年度までアユの冷水病およびエドワジェラ・イクタルリ症対策として河川域水産資源調査事業で実施していた県外産種苗放流情報の収集と県内産人工種苗の保菌検査について、今年度から本事業の中で実施することとした。

3. 結果

(1) 疾病発生状況

今年度の魚病診断件数は、海面1件、内水面6件の計7件であった。概要は次の通りである。

隠岐島前のマダイ中間育成施設で8月に稚魚のへい死が発生した。病原菌や異形肥大細胞は確認されず環境悪化によるへい死と診断したが、その後、抽出DNAを(国研)水産研究・教育機構増養殖研究所(増養殖研)に診断依頼したところ、マダイイリドウイルスが検出された。

石見地域の静間川水系三瓶川において、6月10～21日の間にマゴイ13尾の斃死が確認された。KHV病のPCR検査で陽性となり、増養殖研での確定診断でも陽性となったため、移動禁止措置がとられた。

出雲地域の養殖業者より7月にヤマメの魚病診断依頼があり、冷水病(PCR検査により陽性)とキロドネラ症との混合感染と診断した。

宍道湖自然館ゴビウスより9月にアユの魚病診断依頼があり、細菌性腎臓病と診断した。

(2) モニタリング調査

ヒラメの県内の種苗生産、中間育成施設を対象に種苗搬出前(4月)および放流前(6月)において実施したPCRによる保菌検査で、クドア症(計280検体)、シュードモナス症(計40検体)ともに全て陰性であることを確認した。

県内のコイ養殖業者を対象としたKHV病の定期検査(6月)で、全て陰性であることを確認した。

アユの冷水病およびエドワジェラ・イクタルリ症の保菌検査(30件946尾)では、全て陰性であることを確認した。

なお、疾病発生・診断状況の詳細については添付資料に詳細を記載した。